

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百七十五回 相原良一先生のこと その一

南出喜久治（令和7年9月1日記す）

相原先生は、私が「日本国家構造論」を上梓したとき、東京の紀伊国屋書店でこれを購入されて事務所に連絡して来られたことが縁である。

紀伊国屋書店でこの本を見かけられた人の中には、小室直樹氏も居た。20部ほど買ひたいが、書店経由だと時間がかかるので、直接送つてほしいと連絡があつた。小室直樹は、石川県の大東亜宣戦大碑護持会主催の講演会で共に講演したこともあつて面識があり、何度か会つたことがあつた。20冊も必要なのは、弟子たちに配りたいからであり、マックス・ヴェバーに関する記述に興味があるといふことだつた。後になつてから、真正護憲論を支持されたが、著作にはそのことを反映されずに亡くなつてしまつた。

いづれにせよ、相原先生から連絡があつたのは、これと同じころだつた。

そして、一度会ひたいと言はれて、東京の学士会館で相原夫妻とお会ひした。

そのとき、大学教育を受けてゐない私が、占領憲法が無効であることを論理的に述べた「日本国家構造論」を絶賛され、どうしてこのやうな見解に至つたのかについて詳しく質問された。

私は、生ひ立ちからこれまでのクーデター研究などを独自に研究してきた経緯を説明し、大学教育を受けなかつたことが幸ひしたと答へた。

相原先生は、これをよく理解され、是非とも憲法学会に入会してほしいと要請された。

憲法に関する学会は、左派の公法学会と右派の憲法学会があり、相原先生は憲法学会の理事長を務められた占領憲法無効論者であつた。

そして、憲法学会に入会するのは、憲法学会会員2人の推薦が条件となるので、相原先生と現在の理事長である竹花光範教授が推薦人になるので、是非とも入会してほしいと誘はれ、誠に光栄な話なのでお請けした。

相原先生は、憲法学会の内情を詳しく話され、いまや占領憲法無効を主張する学者は皆無に近いこと、憲法学会にも左派が入り込んで影響を受けてゐることなどの事情があるとのことであり、その具体的な例を話された。

その中で強く印象に残つてゐるのは、民主党が推薦した左翼の小林節を憲法学会に入れようとして画策したのが、大石義雄の愛弟子であつた小森義峯であり、その小林の憲法学会入会に猛烈に反対したのが相原先生と竹花光範教授だつたといふことである。小林は、最

終的に入会を阻まれ、小森は理事長選挙にも落選したといふ経緯があつたらしい。そして、私は 2 人の学者の推薦によつて憲法学会に入会したが、執行部は、やはり占領憲法有効論者で固められ、研究発表の機会すら与へてもらへない状態であつた。

私は、ある講演会で、小森の学説を徹底的に批判したことがあつた。そのとき、最前列で聞いてゐたのが小森だつた。私は、その時まで小森と会つたことも顔も知らない。すると、質疑の時間になり、真つ先に手を上げて発言したのが小森だつた。私が先ほど痛烈に批判されていた小森です、と切り出し、今日の機会は誠にすばらしいご縁であることに感謝します、と言つて質問も反論もしなかつた。そして、小森は、その後頻繁に私の事務所を訪問し、全国有志大連合（全有連）の副会長になつてほしいと何度も説得された。全有連といふのは、初代会長片岡駿が立ち上げた団体で、帝国憲法復元運動では、「正統憲法の復元改正」のスローガンが用ゐられ、その出発的となつたのは谷口雅春の帝国憲法復元運動が奈義町の復元決議を結実させた歴史的な経緯を踏まへてのものだつた。ところが、片岡が急逝し、二代目会長を小森が引き受けた。小森は、占領憲法を憲法として認める有効論者でありながら、自己の学説とは異なる全有連の会長となつたのは、学説と運動とは別だとする優柔不断な性格のためである。小森は、帝國憲法の改正無限解説を唱へ、無限界の改正ができるので、占領憲法は憲法として有効だとする反國體論者である。その意味では、到底小森の要請を受けることはできないので、ずっと拒否してきた。